日本人だけが知らない世界の常識

第四話　男女の礼儀編（後編）

今回も、前回に引き続き「性の文化の壁」について考えていきましょう。
まずは避妊について。避妊の方法はたくさんありますが、何がどう利用されているかというところにお国柄が表れます。それについてのエピソードです。

【避妊万別】

エリート商社マンの田中さんは、世界各国を回っていた。出張だけで年に二十カ国、一、二年に一度は別の国に転勤になる忙しさだった。英語や中国語をはじめ、十カ国語を話せるものだから、いろんな国の仕事を任されるようになったのである。
田中さんには、麻美子という娘がいた。顔はすっきりとして美しく、かつ日本人特有のやさしさを持ち合わせていた。田中さんにとっても自慢の娘だった。
麻美子さんは行く先々で現地の学校に入学し、様々な国籍の同級生と親交を深めた。中学へ通う頃になると、その美貌から行く先々でボーイフレンドができ、セックスをするようになった。避妊法は国によって違っていた。
高校一年の頃、麻美子さんはタイにいた。そこでは、ボーイフレンドはコンドームを二重に使用して初体験をすることになった。ＨＩＶの流行が騒動になっており、感染を恐れて二つ重ねて使う人が多くいたのである。
大学に上がると、今度はアメリカへ渡ることになった。この国では、女性は自ら身を守らなければならないという考え方だった。そこで、彼女は友だちに教わり、ピルを飲むことにした。念には念を入れて、緊急ピルまでバッグに忍ばせた。それが自由の国アメリカの流儀だったのだ。
やがて、大学在籍中に、麻美子さんはインドネシアに留学することになった。イスラーム文化の勉強がしたくなったのである。
現地の大学に留学した時、彼女は婦人科を訪れ、ピルを処方してもらおうとした。だが、インドネシア人の医師は首を横にふって答えた。
「ここではピルを処方する習慣はありません。その代わり、避妊注射をしているのです。この注射を打てば、三カ月間避妊効果がありますので、安心して下さい」
郷に入れば郷に従えということで、麻美子さんは定期的に避妊注射を打ってもらい、ボーイフレンドと遊ぶことにした。毎日薬を飲む必要もなく、かといって男性に避妊を任せるわけでもない。意外に便利だった。
やがて大学を卒業すると、麻美子さんは日本に帰ることになった。外資系企業の日本支部に勤めることになったのである。ここでもすぐに日本人のボーイフレンドができた。初めての夜、彼女はベッドの中でこう尋ねた。
「私、幼い頃からいろんな国を回っていたから、日本ではどうやって避妊しているのかわからないの。ねえ、教えて？」

恋人は「大丈夫、僕に任せて」とうなずいて、そのままセックスをはじめた。麻美子さんは心配だったが、「日本人は紳士的で、科学につよい。きっとパイプカットをしているのだろう」と思い、黙っていた。
セックスが進み、いよいよ果てようとした時、恋人の男性は無言で中断したと思うと、立ち上がり、麻美子さんの顔に向かって射精をした。麻美子さんは驚いて何が起きたのかわからなかった。やがてハッと我に返り、思わず叫んだ。
「オーマイガ！　どういうつもりなの？」
恋人は汗を拭きながら、平然とこう答えた。
「これが日本流の避妊法なのさ」
そう、日本では体外射精が避妊の方法として考えられていたのである。

国によって、避妊方法は大きく違うと言われています。一体どう違うのでしょうか。代表的なものを示すと、次のようになります。

＊国別避妊方法（立川相互病院ＨＰより）
日本：コンドーム（75.3%）　ピル（1.3%）　ＩＵＤ※（4.9%）　不妊手術（6.2%）
米国：コンドーム（17%）　ピル（32%）　ＩＵＤ（3%）　不妊手術（34%）
インドネシア：コンドーム（1.8%）　ピル（66.1%）　ＩＵＤ（27.7%）　不妊手術（4.1%）
中国：コンドーム（3.9%）　ピル（5.5%）　ＩＵＤ（41.4%）　不妊手術（47.7%）
韓国：コンドーム（10.2%）　ピル（6.1%）　ＩＵＤ（10.5%）　不妊手術（57.6%）
※ＩＵＤ＝避妊リング

こうして見ると、各国の避妊方法がまったく異なっているのがわかりますよね。
日本はコンドーム大国ですし、米国とインドネシアはピルの使用が盛んです。インドネシアのピルの回答の中には、避妊注射も含まれているのでしょう。
一方、一人っ子政策で有名な中国ではＩＵＤによる避妊が多く、韓国の場合は不妊手術が大部分を占めます。
不妊手術の男女比は、その社会の男女格差の縮図ともいえます。本来は女性よりも男性の方が手術は簡単なのですが、社会的な圧力などによって女性の手術の方がどうしても増えてしまうのです。
たとえば、日本は「女 5%、男 1.2%」、米国は「女 20%、男 14%」、インドネシア「女 3.5%　男 0.6%」、中国「女 36.2%　男 11.5%」、韓国「女 44.9%、男 12.7%」です。
日本やインドネシアでは、不妊手術を受けている人の数は少ないですが、韓国や中国ぐらい多いと、社会問題にならざるをえませんよね。韓国などは、これによって性感染症が拡大し、社会問題にまでなっているといいます。
ところで、避妊にはいろんな迷信がついて回ります。昔の日本では、「膣に射精した後でも、飛び跳ねたり、逆立ちしたりすれば避妊できる」という話が信じられていました。そこで、ことが終わった後、男性は煙草を一服し、女性はその横でジャンプしたり、壁に向かって逆立ちしたりしていたようです。今の若い女性のように「セックスが終わった後の余韻が好き」なんて言っている余裕なんてなかったのでしょう。

戦後になると、「セックスの後に膣内をコカコーラで洗えば妊娠しない」という話もつたわりました。コカコーラの代わりにビールでも同じ効果があるという噂もあったそうです。
海外でも、コーラにまつわる避妊の噂があります。膣内洗浄ばかりでなく、コーラやポテトチップスを飲み食いしていると、不妊症になるという噂も作られたそうです。もちろん、こうした噂は根も葉もないもので、コカコーラ社にとってはいい迷惑ですよね。
もっとも、この噂を信じた人のお陰で売上が上がったこともあったかもしれませんが。

【剃毛】
エジプトに留学していた日本人の信彦君は、大学卒業後、現地の企業に勤めた。日本とエジプトの貿易関連の仕事に就いたのだ。
数年後、信彦君はエジプト人の上司の紹介で、現地の女性と結婚することになった。華やかな結婚式が行われ、初夜を迎えた。信彦君はドキドキしながら彼女を抱きしめ、服を脱いだ。
と、その時、彼女が信彦君の下半身を指さして、急にゲラゲラと笑いはじめた。
「ちょっと、何それ。毛が生えているじゃない。やめてよ〜」
彼女の笑いは止まらない。一体どうしたというのか。
花嫁は言った。
「イスラームじゃ、陰毛を剃る決まりなのよ。陰毛を剃らないのは、髪や爪を切らないのと同じ。あーあ、気持ち悪いもの見ちゃった」
たしかに外国人は陰毛を剃る習慣があると聞いたことがあった。信彦君はそれっきり自信を失い、妻とベッドを共にすることがほとんどなくなってしまった。
それから五年後、今度は日本にいた信彦君の妹である信子さんが韓国人と結婚することになった。信彦君はかわいい妹に同じ失敗はさせまいと、自分の失敗を語った。信子さんはそれを聞いて、陰毛を剃ってから結婚式に臨むことにした。毛を伸ばしっぱなしにして笑われることだけは避けたかったのだ。
韓国での結婚式が終わり、初夜を迎えた。信子さんは「どうだ」とばかりにベッドの中で陰毛を剃った下半身を披露した。すると、韓国人の夫は蒼ざめ、絶句した。なぜなのだろう。
夫は言った。
「君は、売春婦だったんだね。よくも僕をだましてくれたものだ。傷が浅いうちに離婚をしよう」
韓国には陰毛を剃る習慣がなく、処女性が重んじられる。夫が剃られた陰毛を目の当たりにして、妻を売春婦だったと思ったのは無理もないことだったのだ。

海外では陰毛を剃る習慣が普及しています。欧米に暮らす白人たちも剃りますし、中南米の人たちも剃ります。東南アジアの人たちでも、剃っている人は少なくありませんね。日本人は腕や足の毛を気にしますが、彼らはそちらより陰毛を剃ることをエチケットとしているようです。
イスラームの場合は、宗教的習慣に基づく剃毛だといえるでしょう。男も女も身を清めるために陰毛を剃ります。特に、男性は礼拝の日である金曜日、祈りの前に陰毛や腋毛を剃るのが習慣になっています。剃毛が、宗教的な礼儀の一つになっているのです。

面白いことに、テロリストなどは自爆テロを起こす前に剃毛をするといわれています。彼らにとって自爆テロは一つの「宗教行為」です。もちろん、的外れな行為なのですが、そう思い込んでいるのです。そのため、自爆テロに行く前にはシャワーを浴び、陰毛や腋毛を剃って身を清めてから出かけるのです。

一方、日本では陰毛を剃る習慣があまりありません。最近はカットしたり、部分的な永久脱毛をしたりする人は増えてきていますが、すべて剃っている人は少数派のはずです。なんとなく陰毛を剃っている人＝「商売女（男）」とか、「下半身を過剰に意識すべきでない」という昔ながらの偏見が残っているのかもしれません。

これは他の東アジアの国でも同じようです。台湾、中国、そして韓国にも、陰毛を完全に剃ってしまう習慣はありません。剃っていたら、「一体何のために剃っているのか」と変な目で見られることでしょう。処女性を重要視する国であればあるほど、その傾向はつよいといえるはずです。

処女性といえば、韓国には面白い話がつたわっているそうです。『馬を食べる日本人　犬を食べる韓国人』（ふたばらいふ新書）から引用しましょう。

一九七〇年代、新婚旅行のメッカである済州島のホテルのベランダでは、午前二時になると新郎が吸うタバコの煙があちこちで立ちのぼったという。
「処女だと思ったのに、そうじゃなかった……」
新郎たちは落胆してタバコをふかしていたのだ。
一九八〇年代、やはりホテルのベランダはタバコの煙でいっぱいだった。しかし、今度は理由が違った。
「処女膜再生手術なんかしなくてもいいのに。なんて馬鹿なことを……」
やはり落胆の紫煙だった。韓国の男性が「初夜の出血」にこだわるあまり、女性は結婚前に処女膜再生手術をして応じるようになったのだ。
そして一九九〇年代から二〇〇〇年、新郎たちのタバコの煙はあいかわらずだった。またしても意味が違っていた。
「この年まで処女だったなんて、何か問題でもあったのだろうか……」
とまどいの紫煙だった。

この話を読むと、韓国人男性の考え方の変遷がわかりますよね。もしかしたら、近い将来、タバコの煙の理由が「陰毛を剃っていなかったなんて、何か問題でもあったのだろうか……」となることもあるかもしれません。

ところで、陰毛を剃る習慣は、シラミが原因で生まれたという説が一般的です。寄生虫の一種であるシラミは毛について、猛烈な痒みを引き起こします。日本でも戦後はシラミだらけの子供がたくさんいたものです。髪の毛に寄生することが多いのですが、陰毛にも寄生します。そのため、陰毛を剃る習慣が生まれ、それが今に至っているというのです。ファッションではなく、生活の必然性から生まれた習慣だったんですね。

【禁欲日】

日本の日本海側の町に、中古自動車の輸出をしている会社があった。パキスタン人の社長

がおり、その下にはバングラデシュ人やイラン人などたくさんのイスラーム教徒の外国人が働いていた。日本人である美里さんは、そこで事務の仕事をしていた。

ある年の春、美里さんは職場のパキスタン人社長と恋に落ちた。彼は若くてやり手で、しかもお金持ち。それなのに、独身だった。彼女はなんとか彼を手中に収めようと、必死のアプローチをくり返し、恋人にまでなったのである。

二人の相性は抜群だった。彼は恋愛の経験が浅く、美里さんにほれ込んでいた。周りの人たちも温かく見守ってくれていた。半年が経つ頃には、周りでは結婚についての噂が囁かれるようになっていた。

年の暮れ、パキスタン人社長は美里さんをレストランに誘い、プロポーズをした。指輪を用意して「結婚して下さい」と言ったのだ。美里さんは大喜びし、嬉し涙を流した。そして、彼が用意してくれていたホテルの一室に入った。

だが、美里さんには心配があった。実は、この日ちょうど生理が来てしまっていたのだ。しかし、この夜の誘いを断るわけにはいかない。美里さんはシャワー室に入り、生理の血をできるだけきれいに流してからベッドへ行った。きれいにして、できるだけ早くすれば、出血は最低限に留められるかもしれないと思ったのだ。

暗くした部屋の中で、二人はことに及んだ。パキスタン人社長は気持ち良さそうに果ててからシャワーを浴びに行った。と、その直後だった。突然、シャワールームから叫び声が聞え、彼が駆け寄ってきたのだ。

「おい、美里。おまえ、生理なのか。俺の下半身に血が大量についているぞ！」

美里さんは頭を下げて答えた。

「あら、ついちゃったの。ごめんね。洗ったから大丈夫だと思ったんだけど」

すると、パキスタン人社長は怒って言った。

「ふざけんな！　俺はもう終わりだ。おまえとは縁を切る。結婚も取りやめだ！」

「え、どうして？」

「どうしてもクソもあるか。イスラーム教徒は、妻とは言え、他人の血に触れちゃいけないんだよ。生理の血なんて言語道断だ！」

彼はそう言ってホテルの部屋から出て行ってしまった。

翌日、その噂は外国人社員の間に広まった。生理なのにセックスを強いた悪い女だということになっていたのだ。美里は居心地が悪くなり、退職願を出さざるをえなくなった。

イスラーム教徒は血を極端に嫌います。触るのはもちろん、見ることすらしようとしません。人間ばかりでなく、動物の血液さえそうなのです。

これは料理に使う肉にも当てはまります。彼らは動物をしめる時、頚動脈を切り、すべての血を出し切ってから料理用として使います。動物の血液が人間の体内に入ると、体が穢れ、病気になってしまうと信じているのです。

そうした特別な処理を施された肉は「ハラル」と呼ばれています。イスラーム教徒は、ハラルとして認められた肉しか食べてはならない決まりになっているのです。

イスラーム教徒が生理の時にセックスをしようとしないのは、そうしたこともあるようです。いくら恋人とはいえ、生理中の女性とセックスをすることはかたくなに拒みます。不可避的に血がついてしまうのならともかく、故意に行うことはタブーとされているのです。血

を食べたり、血に触れたりしたら、「病気になる」なんてことが実しやかに囁かれることがあるのです。

また、外国には、血液への接触以外にも、前戯を嫌う文化もあります。中東、南アジア、東南アジアなんかも、あまり前戯をしないと言われています。

それらの国で、外国文化に接している者はともかく、現地の文化にどっぷり浸かって生きているような人ですと、性器を舐めたり、触れたりすることで、ケガレがうつるとか、病気なると考えるのです。

私の体験からいえば、貧困層であればあるほど、その傾向は強いと思います。

たとえば、スラムに住んでいる人や路上生活をしている人たちには、前戯という習慣がほとんどありません。単純に、体を洗う習慣に乏しいため、「汚い」ということがあるのでしょう。路上生活者たちがくり広げるセックスを目撃したことが何度かありますが、ほとんどすべてのケースで、いきなり挿入していました。生活環境に応じて、性行為も変わるということなのでしょう。

こうしてみると、陰毛を剃る習慣にしても、セックスの前戯についても、いずれも生活習慣に深く根づいたものだと言えるのかもしれません。